



Nature Communicatio  
11, Oct, 2011

## 「生体エネルギー論 Bioenergetics」

名誉院長 西 田 敬

燃盛る熱球として出現した地球も、漸く冷却期に入り、種々の化合物や水などの分子が地表を覆い、Brown運動などに因る互いの衝突など。離合集散を繰り返す。最早、浮遊物の集塊ではなく、生体膜で覆われ、歴とした個別の生命体として識別可能となる顕生代に入る幕開け、海底火山の熱源を食餌の糧とする、今や、押しも押されぬ生命体の一員。水素エンジンは究極の無公害車。排気ガスは水蒸気のみ。恰もToyotaかHondaの新型車の展示会の様だが、地球上の生物の話。

即ち、Bioenergetics生体エネルギー論。当初は不断にある原料から手を付けた。即ち、光

源=灯心。自身が燃え尽きてしまう。所謂、炉心溶融(nuclear meltdown)。チェルノブイリには懲りた筈。然らば、代替えのエネルギー源は?後にglycolysis with or without oxygemに取って替わられるが、癌の嫌気性解糖は、決して新規登場したものではなく、単に惑星出現の黎明期までの先祖帰りとも納得される。水素、硫黄、を始め不断にある熱源から糖質を選んだ時点では有毒ガスを排出しない利点が買われたのであろうが、どっこい、oxidantの弊害か、糖の燃焼には発癌物質の産生と云う晩期副産物が必須の付録と為った。

